

大学生のアルコール依存症に対する意識調査

- 誤解・偏見と性差 -

楊 汐潔

(明治学院大学心理学部心理学科)

(学籍番号：18PS1169, 指導教員：西園マーハ 文教授)

キーワード：AA, アルコール依存症, 自助グループ, スティグマ, 女性

問題

飲酒に対して寛容な日本社会では、アルコール依存症は、多くの人にとって、決して遠い存在ではない。日本において、生涯でアルコール依存症に罹患する人は全人口の約1%である。2013年に行われた日本成人の飲酒行動に関する全国調査によると、ICD-10の基準によるアルコール依存症の生涯経験者数は、男性の1.9%、女性の0.2%であり、推計数は男女合わせて107万人近い規模にのぼる(尾崎, 2016)。女性より、男性アルコール依存症者の数をはるかに多いが、それが変わりつつあるのが現状である。習慣的に飲酒する男性は年々減少傾向にあるが、女性患者数は増加傾向にある(依存症対策全国センター, *n.d.*)。

アルコール依存症の成因は、環境要因と遺伝要因が同等に重要である(Enoch, 2012)。また、アルコール依存症は身体的・心理的・社会的側面に及ぶ複数の症状が見られること、そして罹患した当事者やその周囲に与える苦痛の深刻さから、アルコール依存症は現代の日本が抱える深刻な社会問題と考えられる。

アルコール依存症とは、飲酒のコントロールができなくなる病気であるが、人びとはこのアルコール依存症について、本人の意思の問題と誤って評価し(清水, 1985)、偏見やステレオタイプを持ちやすい。

アルコール関連問題の高リスクには、未成年、出産適齢期や妊娠中、授乳中などの女性が挙げられている。しかし、アルコール関連問題についても男性以上に女性に対する偏見・差別は強い(樋口・河野, 1996; 斎藤, 1996)。アルコール依存症者の罪悪感や恥の強さや自尊心の低さは指摘される部分だが、女性の依存症者は男性以上に偏見に悩ま

され、罪の意識も非常に強く、大変生きづらい状況に置かれているといえる。

アルコール依存症の治療において、精神療法や認知行動療法等の心理社会的治療法が主流である。医療機関で行う依存症治療は集団療法、医療機関以外では自助グループが挙げられる。全国的な自助グループには、公益社団法人全日本断酒連盟(以下、断酒会)とアルコホーリクス・アノニマス(Alcoholics Anonymous, 以下AA)がある。断酒を継続するためには、AAのような自助グループへの参加と、参加を継続するための本人の意識や自助グループでの活動が重要である(大野・石川, 2016)。

目的

本研究では、主に日本の大学生のアルコール依存症に対する意識調査を行う。主な目的は以下の5つがある。

目的1：大学生の初飲年齢やAUDIT得点を調べ、日本や他国の大学生のものと比べ、日本の大学生の飲酒状況を位置付ける。

目的2：大学生がアルコール依存症における性別のスティグマが存在することを証明し、アルコール依存症者に対するスティグマの程度を調査する。

目的3：アルコール依存症者に対する大学生の理解や態度を明らかにし、態度への影響要因(年齢・性別・居住形態・飲酒習慣・学習経験・周囲の人間等)を検討する。

目的4：アルコール依存症者のイメージや自助グループやハームリダクションの認知度を調べる。

目的5：アルコール依存症者であるAAメンバーの実態を把握し、大学生との違いを明らかにする。

方法

研究Ⅰでは、2021年7月9日から10月9日にかけて、日本首都圏文科系私立大学1校において、Googleフォームを用いて調査を行った。回収された調査票120のうち、18歳から24歳までの116名（有効回答率96.7%、女性99名、男性17名）を検討対象とし、The Alcohol Use Disorder Identification Test: AUDITを用いた飲酒状況調査とビネットを用いたアルコール依存症に対するイメージ調査を行った。研究Ⅱでは、2021年11月1日から2022年3月3日にかけて、日本全国各地のAAメンバーを対象に、Googleフォームを用いて調査を行い、大学院での研究の一部とする予定である。今回は、2021年12月1日までに回答した6名（有効回答率100%、女性3名、男性3名）のAAのメンバーに、飲酒習慣やアルコール依存に対するイメージ調査を行った。尚、本研究は明治学院大学心理学部倫理委員会の承認を得ており（承認番号：20210024）、倫理的配慮にのっとり実施した。

結果

研究Ⅰ (1) AUDITの平均点は3.12(±3.42)で、9.4%が8点以上の高得点であった。高得点者は全員女性であった。(2) ビネットを用いた質問では、男性依存症者と女性依存症者に対するイメージは異なり、女性依存症者に対しては、アルコール依存症は「自己責任」「意志が弱い」とは思わず、「友達になる」「同じ職場で働く」ことに賛成する傾向があった。特に、女性回答者、心理学科やAUDIT高得点者にはこの傾向が強かった。(3) 高校の授業で「アルコール依存症」を勉強した人は87.9%、大学では55.2%であった。(4) アルコール依存症者のイメージについて、「飲酒のコントロール不全」「ストレス・疲労」「離脱症状」等の回答が最も多かった。(5) 回答者の家族・友人・知人の中にお酒で問題を起こした人がある人は3割だった。そして、(6) 治療法について、「自助グループ」と「減酒法」の有効性を支持するのは合わせて87.1%であった。

研究Ⅱ 6名のアルコール依存症者であるAAメンバーの初飲年齢は大学生とほぼ変わらなかったが、家族にアルコール症者がいる人が66.7%であった。学校で「アルコール依存症」について勉強した人はいなかった。また、当人はアルコール依存症

者について「飲酒のコントロール不全」「人間関係の不得手」などのイメージを持っているが、社会からは「意志が弱い」「危険」等が思われていると推測する傾向があった。

考察

研究Ⅰ 本研究より、女性、実家暮らしを含む同居人がいる人、一人飲みより皆と飲むことが多い人には、AUDIT高得点者の割合が高いことが分かった。また、アルコール依存症者に対するスティグマの程度は、性別、学習経験および飲酒習慣によって影響される。また、自助グループやハームリダクションの有効性は大学生に支持され、今後のアルコール依存症における治療現場の変化が示唆される。そして、コロナ禍の中で行った調査にもかかわらず、コロナ禍以前による日本国内外の先行研究よりAUDIT平均得点が低いことから、コロナ禍が私立大学生に与える影響は、想定より少ないと思われる。

研究Ⅱ 定期的にミーティングに出席しているAAメンバーでもセルフスティグマが存在することが示唆される。また、これは学校での酒害教育の不足や家族・友人の影響によるものだと考えられる。

本研究より、日本の大学生には女性より男性アルコール依存症者に対するスティグマ的態度が強いことが示唆される。学習経験がスティグマの軽減に繋がるため、教育の取り組みが重要である。

主要引用文献

- Enoch, M. A. (2012). The influence of gene-environment interactions on the development of alcoholism and drug dependence. *Current Psychiatry Reports*, 14(2), 150-158.
- 大野順子・石川利江(2016). 断酒のきっかけと断酒継続への支援 -AAメンバーへのインタビューから- 桜美林大学心理学研究, 7, 85-94.
- 尾崎米厚・松下幸生・白坂知信, 他(2005). 我が国の成人飲酒行動およびアルコール症に関する全国調査 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 40, 455-470.
- 清水真二(1985). アルコール乱用の社会病理学的視点 社会精神医学, 8, 183-189.